

W-3-5 LDL吸着療法が有効であった膜性腎症の一例

岡山済生会総合病院 腎臓病センター

中村明彦、上田貴美子、菊本陽子、長宅芳男、平松 信

【症例】57歳、男性。既往歴・家族歴特記なし。平成12年6月、全身浮腫、一日尿蛋白(UP)6.6 g、s-Alb 1.8 g/dl、Cr 1.11 mg/dl、TC 450 mg/dl、LDL 259 mg/dlからネフローゼ症候群と診断。腎組織は膜性腎症(Stage1)で、尿細管間質には多数の foam cell と軽度線維化を認めた。PSL 40 mg/日を開始、高脂血症は治療に抵抗した。ミゾリビン併用後も UP 5-11 g で推移。PSL は漸減し、治療抵抗性ネフローゼ及び高脂血症に対し、平成13年3月から LDL 吸着療法を計 12 回行った。Cr 0.8-1.0 mg/dl、s-Alb 2.0 g/dl 以上を維持したが、同年7月に Cr 1.72 mg/dl と急速に悪化、腎再生検では膜性腎症(Stage2)で糸球体硬化の進行は認めず、尿細管間質に foam cell 増加と線維化進行を認め腎機能低下の主因と考えた。脂質異常に伴う尿細管間質病変の進行も考え、同年8月より週 1 回のLDL吸着療法を開始。現在、脂質を正常に管理し、UP 5-6 g、s-Alb 2.2 g/dl と改善傾向、Cr 1.4-2.3 mg/dl とやや悪化したが安定している。

【結論】膜性腎症による難治性ネフローゼ症候群に対しても、LDL吸着療法を用い嚴重に脂質管理を行うことで、尿細管間質病変の進行を抑制できる可能性がある。